

# 鳥取西高近畿同窓会報

第15号

2022年4月1日発行

発行：鳥取西高近畿同窓会

発行責任者：窪田邦倫（西高45年）

編集責任者：山内紀嗣（西高43年）



## 故郷で想うこと

鳥取西高近畿同窓会

会長 窪田 邦倫

(西高四五年)



今年初め、久しぶりに故郷に帰りました。普段は車を使いますが、今回はJRを利用し、神戸から鳥取を目指しました。車窓から眺める懐かしい光景に心を躍らせながら約二時間で、鳥取駅に到着。ホームから見る駅前の景色、交わされる言葉、五感に感じる空気。どれを取っても、そこには『故郷』がありました。

改札口に向かう途中、大きな傘が展示されていました。鳥取の夏を彩る「しゃんしゃん祭」をアピールするものでしょうか。思わず足が止まりました。同時に「高校時代の体育祭でみんなと一緒に『傘踊り』を踊ったな」と、当時の思い出が蘇ってきました。やがて「玉手箱」を開けたように、高校時代の出来事が次々と頭の中に浮かびました。恩師、友人らの顔や当時の情景が鮮明に現われます。母校とは、卒業後も『思い出という宝物』を届けてくれる大事な存在なのかもしれません。

鳥取西高は来年（令和五年）創立百五十年を迎えます。翌年（同六年）には、近畿同窓会が設立六十周年の節目を迎えます。一方で、一昨年からは、コロナの影響を受け、近畿同窓会も会員同士の交流機会がめっきり減りました。

想定していなかった事態となり、二年連



鳥取駅構内に展示された大傘

続で総会・懇親会が開催できませんでした。久しぶりの再会を楽しみにされていた会員の皆様には、誠に申し訳ありません。「人と人との絆を大切にしたい」。同窓会の価値と役割は、コロナ禍がもたらしたこんな時代だからこそ、重要性を増しているのではないかと、思います。卒業生として『同窓会の魅力』を出来るところから地道に伝えていこう。コロナ禍で、そんなことを改めて考えさせられました。同窓会の目的である「会員相互の連絡親睦」と「母校の発展」という原点に立ち返り、魅力ある近畿同窓会にするため

## 第57回鳥取西高近畿同窓会ご案内

日時：令和4年6月26日（日） 11:00～14:30

（受付は10:30より）①総会：11:00

②懇親会：12:00～14:30

会場：大阪キャッスルホテル6階

大阪市中央区天満橋京町1-1 TEL 06-6942-2401

会費：¥7,000（会場にご持参ください）

（29歳以下の方は5,000円）

長寿（80歳）の方のお祝いは当日出席された34年卒、35年卒、36年卒の方が対象となります。

コロナウィルスの収束状況などで中止・延期の可能性もあります。

の模索を続けていきたいと思えます。会報も号数を積み重ね、母校卒業後のありのままの姿を映し出す『アルバム』のように残していきたいと考えています。今年こそは総会・懇親会を開催し、多くの会員の参加をいただき、皆様から今後の会の活動について、ご意見などを聞かせていただければ嬉しいです。皆様の身近に未加入の方がおられましたら、ぜひお声をかけていただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。



# コロナ禍での オンライン同窓会

西高四一年 後藤(吉開)玲子

私は、一九六六年鳥取西高卒業後東京女子大学を経て、やや紆余曲折あったが、一九七四年弁護士となった。幸か不幸か弁護士には定年がなく、数年前から辞めどきを模索しながら今に至っている。

弁護士業界もコロナ禍でオンラインによる会議や研修が一般化した。私は新しいツールにはいつも及び腰であるが、この情勢ではそうは言っておれず、事務所スタッフの助けでZoomのアプリをインストールし、オンラインの会議や研修に参加するようになった。

二〇二〇年は東京女子大学の元寮生による二年に一度の同窓会が神戸で予定されており、私は輪番制の幹事として早くから準備していたが、夏になってもコロナ収束の兆しはなく、やむなく同窓会は中止とした。しかし中止では幹事役を次に廻すことはできず、苦し紛れに思いついたのがオンラインによる同窓会であった。

二〇二〇年一〇月オンラインによる同窓会への参加を呼びかけた。メンバーはもちらん全員が女性、名簿上は一〇〇名ほどだが、同窓会参加者はここ数年二〇名前後で、そのほとんどは私も含め前期高齢者である。果たして今回参加者がいるだろうか、と危ぶんでいた。

しかし蓋を開けるとなんと一五名が手を挙げ、そのほとんどがZoom未体験者だった。

た。私自身もホストとしてZoom操作するのは初めてである。そこで二度も皆で予行演習をし、二〇二一年一月オンライン同窓会の開催に至った。

歩行困難なためベッド上からの参加者もいる中で、各自用意した飲み物で乾杯、一人三分間スピーチと続き、あつという間に予定の二時間は過ぎた。

初回が好評だったことやオンラインならではの手軽さで、昨年九月に第二回を開催、そして今年三月には第三回目の開催を予定している。メンバーが高齢化していることもあり、コロナ禍が去ってもオンライン同窓会は続く予感がある。そして一番の誤算といえ

ば、幹事役が当分私に固定されそうなおとである。

## 「贈り物」

西高四五年 酒澤一嘉



コロナ感染が始まって以来、ほとんどの時間を家で過ごす生活が続けてもう二年近く経とうとしています。皆様いかがお過ごしでしょうか？ 私にはこの日々が、まさに空白のごとき期間に思えると共に、いままでも何でもなかった事の有難さを実感した毎日でした。ただ、この虚ろな二年間の中でひとつだけ本心に嬉しかった事があります。

それは「家族」が増えた事です。その「家族」とは、小さな小さな女の子の子猫です。初めてペットショップで会った瞬間、その子は私の目を見つめ、力一杯その細い手を伸ばし大きく泣きました。コロナ禍で毎日

を空しく過ごしていた私は、懸命に精一杯自分を主張する姿にとても感動して、即決で「家族」に迎えました。その時はお眼目が異様に大きい痩せ気味の子猫でしたが、二歳になった今、猫らしく可愛らしい子猫になりました。見た目の雰囲気から「くう」ちゃん

と名付けました。「くう」ちゃんは、「鬼ごっこ」が大好きで、追いかけると「待ち伏せ」をしてびつくりさせられます。とてもお茶目ですが結構お利口で自分の意思を相手に伝えるのが上手です。遊びたい時には、おもちゃを啜えて持ってきて目の前に置きます。そして少し言葉も話します。「おはよう」、「ハイハイ」とか「あかん」とか。

私の言う事も少し理解します。「待って」、「いいよ」とか「そこへ行きなさい」とか。「くう」ちゃんが家族の一員になったことで、話題が増え、そして笑顔が増え、とても家の中が明るくなりました。これは予想外でしたが、孫は猫を追いかけ捕まえるため動作が機敏になり運動神経が飛躍的に向上し学校の体育の評価も上がったと聞いています。

「くう」ちゃん (4ヶ月)



ともすれば暗い毎日になりがちなのこの時期に「くう」ちゃんは、きつと神様がくださった「贈り物」なのだと思います。これからもこの「家族」を大事に楽しく暮らしたいと思っています。



## 「あの頃の友に 会いたい」

西高四七年 足立陽一

ある日の夕食時、何気なく妻に「一週間早いなあー。あつという間やわ」と言うのと、「えっ!?!」「お父さんでも、一週間早いん?」ときた。しかも疑問符付きで。「どういう意味やネン!」という思わず出かけた言葉は、どうにか引つ込めた。傷口が広がろうな気がして。

多少、情けなくもあり、慥然としてしまふが、定年後の我が家はこんなもので、ま、どことも似たり寄ったりであろうと納得している。(違ったらごめんさい)

さて、現在六八歳、賑やかだった家庭も今や妻との二人暮らし、いつの間に、こんなに年を取ったのかとつくづく思う。若い頃、通勤電車の中で、お年寄り二人が、プロ野球のセ・パ交流戦について話をしてるのだが、全く話がかみ合っていない。にもかかわらず、普通に会話が流れていく。見てて、イライラするし割って入りたいたい気分になったが、今の我々夫婦の会話も他人

が聞けば「聞いてられへん」会話になつていないか甚だ心配である。

ここだけの話、物忘れは絶好調で、人の名前は忘れる、物をどこに置いたか思い出せない、何をするかさえ思い出せない、いかんともしがたい有様である。仕方ないので「神様どないかしてよ」と神頼みしてみたり、神様に「ここが頑張るところ」と励ましたりしている。

今、世の中はコロナ禍で、不自由な生活を余儀なくされているが、こういう時だからこそ今までも増して、普通に普通のこととが味わる幸せを感じている。

なぜか、西高で過ごしたあの頃の友に会いたい。



鳥取西高の芸術棟（左）と  
体育館（右）

## コロナ禍

### 無念の面会制限

西高五三年 佐々木宏

大切な人に会いたくても会えない。この二年間、同じ思いをした人が全国に世界にどれだけおられるだろう。

昨年一〇月末、母が永眠した。お世話になった特別養護老人ホームは新型コロナ感染が拡大した二〇二〇年三月から面会禁止に。それでも、母の場合はまだ恵まれた方だったと思う。入所の前年にステージ4の中咽頭がん治療を受けた病院へ経過観察の通院に引率することが認められたため、月に一度は会えたからだ。

とはいえ、コロナ前は二〜三日に一度は母の様子を直に知ることが出来たのに。二十世紀梨、富有種、みかんなど母が好物だった果物の差し入れも施設受付に預けるだけ。完食したのか、今年の梨は甘いか甘くないか感想もわからない。持たせていた携帯電話から時折かかってくる電話の内容もとんちんかんになってくる。病院付き添いのたびに認知症が刻々と進んでいることがわかる。

食事をする気力、体力が衰えていくその様子を励ますことのできないもどかしさは計り知れない。危篤になった時、老人ホームは医療行為に制限があるため、点滴治療は三回までという壁があり、延命するなら入院して治療を受ける策を告げられた。が、入院したのでは一切会えない。苦渋の決断の末、施設の方々に看取りをお願いした。

亡くなるまでの十日間で五度、短時間ででも身体をさする機会をいただけたことに感謝するしかなかった。コロナさえなければ、もっと長生きしてくれたのではないかと、と思いたくなくなってしまふ。

要介護4になった母の支援を、と三七年余り勤めた朝日新聞社を二〇一九年夏に五九歳で早期退職。和歌山を振り出しに金沢、高松、奈良、博多、東京、名古屋、大阪など転勤は一五回を数えた。母校を強く意識したのは、入社時の社長・渡辺誠毅氏がOBで「頑張れよ」と声をかけていただいたこと。その後、スポーツ部の大相撲担当として横綱審議委員長になった渡辺さんに電話取材もさせていただいた。夏の甲子園では第七回全国高校野球選手権大会で母校の試合の公式記録員をバックネット裏で務め、快勝後の校歌を歌ったことだ。

現在は鳥取県高野連の依頼で母校の倉庫に保管されている夏の選手権鳥取大会のスクエアブックを一試合ずつチェック、記録集の発刊に向けてボランティアで作業を進めている。

また、講師を務める神戸女子大学、宝塚大学で新聞を教材に一般教養科目を担当している。二〇二二年度こそ少しでも対面授業が出来ることを願うばかりだ。



## コロナ禍の

### ニューヨーク生活

西高H一五年

浦川（竹内）ひかり

長いコロナ禍に見舞われる中、皆様いかがお過ごしでしょうか。私は、二〇一九年五月から約二年間、整形外科医としてニューヨークで医学研究をしております。大変僥越ではございますが、世界のコロナ禍の中心となったニューヨークでの生活についてご報告させて頂きます。

二〇二〇年二月、クルーズ船内の新型コロナウイルス感染が日本を震撼させ始めた頃、ニューヨークではまさに対岸の火事状態でした。しかし、三月にニューヨークで初の感染者が確認されると、その二週間後には、「レストランは営業停止」、「学校は休校」など、緊急の政策が次々と決定され、生活が激変しました。現地の公立小学校に通っていた娘は八ヶ月近く一度も登校できませんでした。ただ、休校から数日でオンライン授業が開始され（アイパッドを持っていない家庭には市から支給）、体育などの実技教科もYouTube動画を教材にしたりして、通常の登校時とほぼ変わらない時間割をこなしていました。



アウトドアダイニングのテント

私はもともと病院内の研究室で電子カルテを参照しながら臨床研究していましたが、コロナ治療に携わる人以外立ち入り禁止となりました。しかし、アメリカではコロナ禍以前から、どこにいても自分のパソコンで電子カルテを閲覧可能であったこともあり、オンラインミーティングを重ねながら、スムーズに自宅で研究を続けることができました。

命の選別が囁かれ、治安の悪化もあり、一時は街全体が恐怖に包まれていました。が、少しコロナ禍が落ち着くと、「アウトドアダイニング」が許可され、各レストランが店舗前の歩道や一部車線にまでテーブルを設置し、外食を楽しむ人々で賑わいました。次第に、大々的にプレハブ小屋やテントを設置する店舗もみられ、これではインドアと変わらないのでは？という状態が、アメリカらしくもありました。

世界中で人々を苦しめるコロナとの戦いが終わりを迎え、西高近畿同窓会も今年こそは開催されることを心より願っております。

### 会員の近況



(昨年の返信はがき通信欄より)

高野泰明(西高二六年)元気でやっていきますが、九十歳になり身体の動きが悪くなりました。同窓会の発展をお祈りしています。武田彰正(西高二六年)一日おきの出勤ですが、元気で勤めています。

古川肇(西高三四年)ワクチン接種も申し込みが大変でしたが、何とか近くの病院で予約できました。

谷口睦子(西高三八年)お陰様で元気にしております。毎月一回実家に風を通すため帰省しております。鳥取は感染者が少ないので安心しております。

花本清乃(西高四〇年)昨年同様、買い物、病院以外は家から出ないようにしています。息子も週三回デイサービスに通わせており、私も日々年々体が大変となりなかなか鳥取へ帰れない状態です。

後藤玲子(西高四一年)声を出す機会が減りましたので、歌唱の個人レッスンを受け始めました。今はドイツリート(ドイツの芸術歌曲)に挑戦しています。

田口徹(西高四二年)七月に四人目の孫ができます。初の男の子です。新型コロナウイルスに負けないで頑張りましょう。

小谷博子(西高四三年)コロナ禍のなか、昨年は六甲山ハイクを楽しみましたが山も結構密になり、今年は方針を変更し近郊の町の公園へ車で出かけました。歩きながら小鳥の姿、さえずり、高山植物の可愛らし

さ、時には野ウサギに出会えたり乗馬クラブの放牧場面に出くわしたりなど癒されています。こんな所にこんな素敵な空間があったのかと新しい発見をした思いです。品田美津子(西高四四年)コロナにも負けない体力をつけるため、体操教室へ通っています。毎年、肩、腰、膝、痛い場所は増えますが元気にしております。

#### 令和三年度年会費ご協力者

(卒業年次順 敬称略)

- 浜本英子、福富照代、岸本宏、近藤春樹、武田彰正、奥谷祐一郎、櫻井典彦、森西良俊、澁谷須万子、村田雪江、佐々木清臣、松永澄子、山根啓作、加嶋敬、田口邦子、洞山容子、田井勇、大倉幸典、田中慶子、田中昂、古川肇、曾根崎崇臣、村尾慎彦、大塚元彦、清未直行、東中文江、常村一則、山田忠尚、米澤道隆、小野洋子、加藤孝幸、西尾彰子、後藤玲子、寺谷英一郎、徳田稔、森田暁、石塚敏子、岩永建夫、上田俊作、大下礼子、小上育代、柴田和子、田口徹、藤岡均、吉田章、米田明弘、安宅寿昭、江阪詩朗、片山寿恵、小谷繁昭、小谷博子、中村彰夫、安居真弓、山内紀嗣、山本雅章、村江信幸、釜谷静雄、品田美津子、中岸千恵、中島順子、花房斎一、濱本義博、松岡孝道、吉村鉄太郎、窪田邦倫

- 佐藤和代、酒澤一嘉、山田陽子、佐々木忠司、谷尾吉郎、岩田育穂、川合くみ子、坂岡隆司、坂口正義、西川愛人、澤美和子、高瀬早苗、山田希代子、松島純子、佐々木映子、田瀬道幸、高田憲一、山本勝之、岩井順一、飼馬誠、大山久美子、清水正俊、勝見武、向井裕子、弓削由佳、小林誠人、窪田倫子、吉永果恵

有り難うございました。(合計九三名)

#### お悔やみ



- 伏野義夫(西高二六年)
  - 木村純子(西高一九年)
  - 新田 修(西高三三年)
  - 高本雄啓(西高三四年)
  - 安宅寿昭(西高四三年)
  - 山本幸生(西高四四年)
  - 竹内智子(西高四六年)
- 慎んでご冥福をお祈りいたします。  
(ご連絡を頂いた方のみ)

#### (事務局連絡先)

〒631-0803  
奈良市山陵町二二六-一  
サンプラザ二〇八  
村江信幸 宛

090-3465-7203

